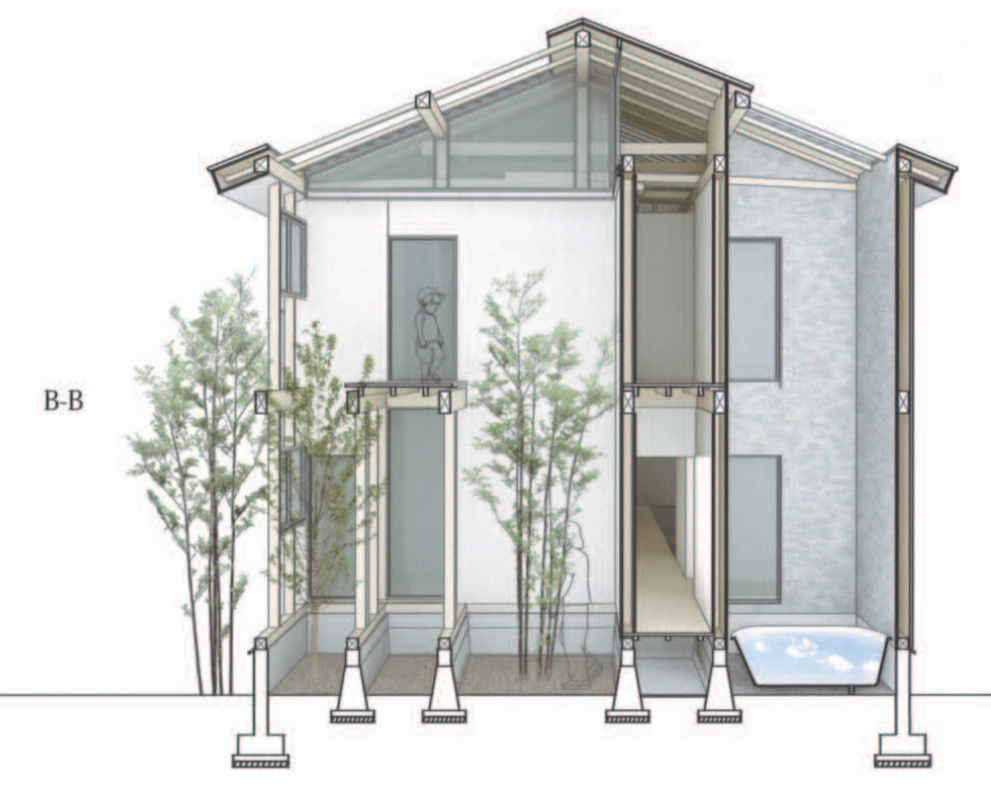
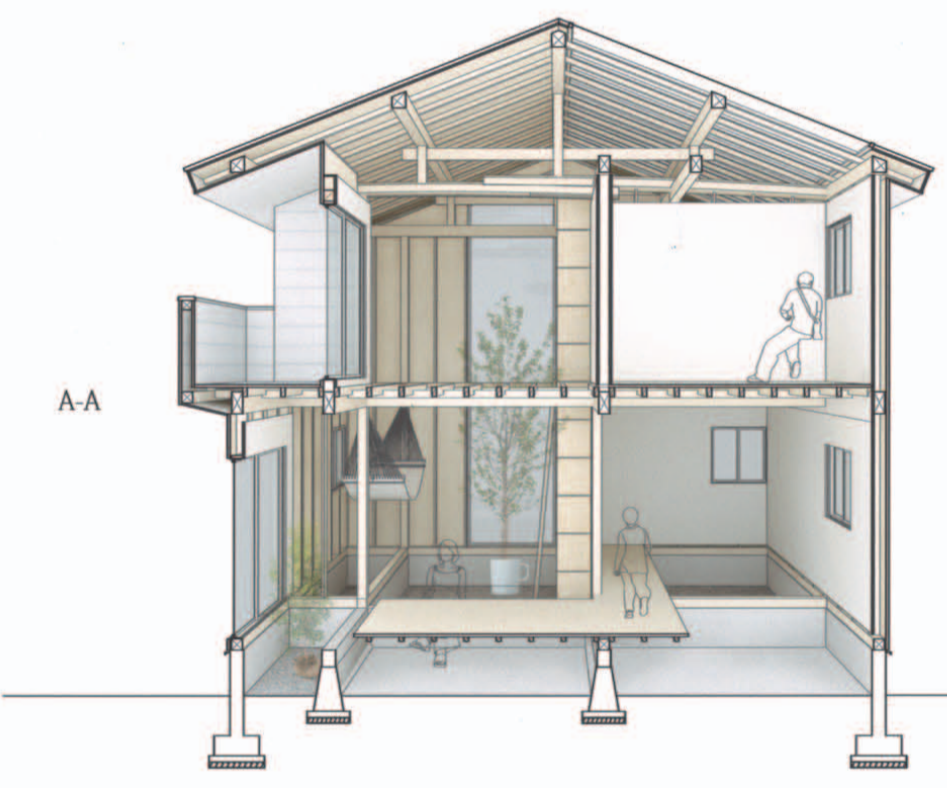


S=1/75



S=1/75

「423.140㎡」

現在の建売住宅は、重設備と規格化により、快適で便利な均質空間を提供し、それらの空間は「床面積」と「室名」という二つの概念、名詞によって無理矢理に性格づけられた「名詞的空間」である。そこでは受動的な(予定調和の)アクティビティが展開されている。私たちは空間を立体として、40坪を132.231㎡×3.2m(平均階高)=423.140㎡の気積として捉え、建売住宅を引算によって改修(差別的構築)する。空間に張り付いた贅肉を剥がしていくことで、機能や性能が削ぎ落とされ、外部環境と緩やかに連続した新しい「環境」が姿を現す。名詞によって固定化された意味は漂白され、居住者は建築要素である壁、床さえも認識することができ、発見によって居場所が生まれていく。時々刻々と変化する多様な空間(環境)の下で、「心地良い」場所で食事を摂り、日差しが「気持ち良い」場所で読書をする。時に猫のように、そこに名詞は必要ない、感覚を頼りに、空間が洩らす「形容詞」に耳を傾ける。この住宅は居住者の解釈によって、オフィス街にもショップにも、公園にさえも認識することができる。それは「住宅」というビルディングタイプを超越した40坪の環境圏だ。敷地は東京郊外、平面図が積み重ねられた均質な住宅が立ち並び、街自体が「ベッドタウン」という名詞の窮屈さを纏っている。今後人口減少、都市集約化により住宅ストック、郊外の新たな使われ方が求められる。差別的構築によって無個性なベッドタウンが、オフィス街にも、別荘地にも、ウィークエンドタウンにも、それらが共存した多様な状態にもなり得るのである。その街並みはいまよりもずっと「形容詞」に溢れたにぎわいのある風景となるだろう。



「132.231㎡」  
-名詞的空間-  
与えられた均質空間に受動的に暮らす。空間を決定するのは面積と室名だけであり、空間は平面上で規定される。



「423.140㎡」  
-形容詞的空間-  
変化する建築環境の中で、居心地の良い場所が空間になる。既存の名詞にとらわれない自由な使い方が生まれ、建築は3次元的に変化する。



南



東



北



西

S=1/150



天井を抜き、屋根を削がす。日射遮蔽という建築の機能は「日傘を差す」という「行為」で代替する。

床板を削がす。「靴を履く」という手間と引替に、建築は人と自然の断絶を溶解する。

大きな窓を穿つ。「断熱性能」と引替に、この家は人も、草木も、樹木も等価に内包する。

床を削がす。隠れていた根太が露出する。意味が漂白された建築の構成要素に、人が新しい意味を見出す。

床を削がす。室名は漂白され、人は現れた基礎を椅子に、買った床を机と認識する。建築と人の距離が縮まる。

階段を剥がす。梯子を持って移動する手間と引替に、上階を特別な場所へと昇華させる。